

可能性への地道なチャレンジ 前職への復帰

株式会社ユニエツクス



情報システムグループ
OA推進チーム

岩崎 広さん (40歳)
(障害等級 2 級)

1999年8月に発症した脳血管障害（左被殻出血）で、右上下肢障害と高次脳機能障害（軽度運動性失語症、記憶障害、注意障害）が残りました。医療および日常生活のためのリハビリテーションを終了後、職場復帰支援プログラムを受け、前職である情報システム部に復帰しました。

OFFICE WATCH



情報システムグループ
OA推進チーム長
鈴木俊雄さん

一人暮らしの岩崎さんが倒れた時、職場の上司が早期発見できたのも、普段とても真面目な彼が無断欠勤をするはずがないと、自宅を訪ねたからでした。会社側が積極的に職場を確保し、復職を可能にした最も大きな要因も、彼の誠実な人柄と約20年間の優秀な実績があったからだと言えます。

また、職場復帰支援プログラムを実施した障害者職業総合センターから、岩崎さんの高次脳機能障害の詳しい状況について説明があったことも、復職を非常にスムーズなものにしました。例えば、現在の岩崎さんにとって、新しいことを覚えることは難しいが、以前にやっていたことなら、それを思い出すきっかけがあればできるので、岩崎さんの過去の経験を生かせるエクセルでの表計算業務からスタートしてもらうなど、適確な業務配分を行うことができたのです。

岩崎さんはあせるとパニックに陥りやすいので、プレッシャーになるような過大な期待はしないようにしています。しかし、岩崎さんは現状に甘んじることなく、一つひとつ障害を克服し、新しい業務もこなすまでにしています。

高い目標を設定して挑んだ 復職へのリハビリ

株式会社ユニエツクスで社内ネットワーク管理を担当している岩崎広さん（40歳）は、脳血管障害（左被殻出血）の発症から約1年後、日本障害者雇用促進協会障害者職業総合センターが実施している「高次脳機能障害者のための職場復帰支援プログラム」でリハビリを行い、前職へ復帰しました。現在は、発症前より業務の負担は減ったものの、情報システムグループになくはない存在として活躍しています。しかし、岩崎さんが復職するまでの道のりは、決して平坦なものではありませんでした。

岩崎さんは、発症1カ月後の1999年9月、運動機能リハビリテーションをスタートしました。ここでは、立ち上がる、左手で箸を持つなど基本的な日常生活訓練が中心に行われました。その後は、記憶障害、注意障害、軽度の失語症など高次脳機能障害に対するリハビリとして、辞書を引ながら日誌を書く、左手を使って「ワード」で文書を作成する訓練も行いました。

「リハビリ前は兄弟や会社の上司、同僚など親しい人たちが見舞いに来てくても、名前がまったく思い出せませんでした。辞書を引く時にも50音順がわからなくなるので、膨大な時間を費やす状態でした」（岩崎さん）

しかし、復職を目標にしていた岩崎さんは、文庫本を書き写す練習、電話応対から野菜の皮むきに至るまで様々な訓練を繰り返し、障害を少しずつ克服していきました。10カ月間にわたるリハビリを終了する頃には、左手での炊事、コンピュータのキーボード操作ができるまでに回復しました。

職業センターの支援と 事業所の受け入れ体制準備

2000年7月、岩崎さんの「職場復帰支援プログラム」がスタートしました。記憶障害や注意障害により、頭の中で物事を整理することが不得意になっていた岩崎さんは、中学入試レベルの算数の応用問題を解く課題などに取り組みました。落ち着いて一つひとつ整理していくことで解けるようになり、徐々に自信をつけていきました。

「岩崎さんは講習以外にも、体力をつけるためにウォーキングをしたりして、復職に向けて懸命に取り組んでいまし

がかなえた

PROCESS

左被殻出血を発症

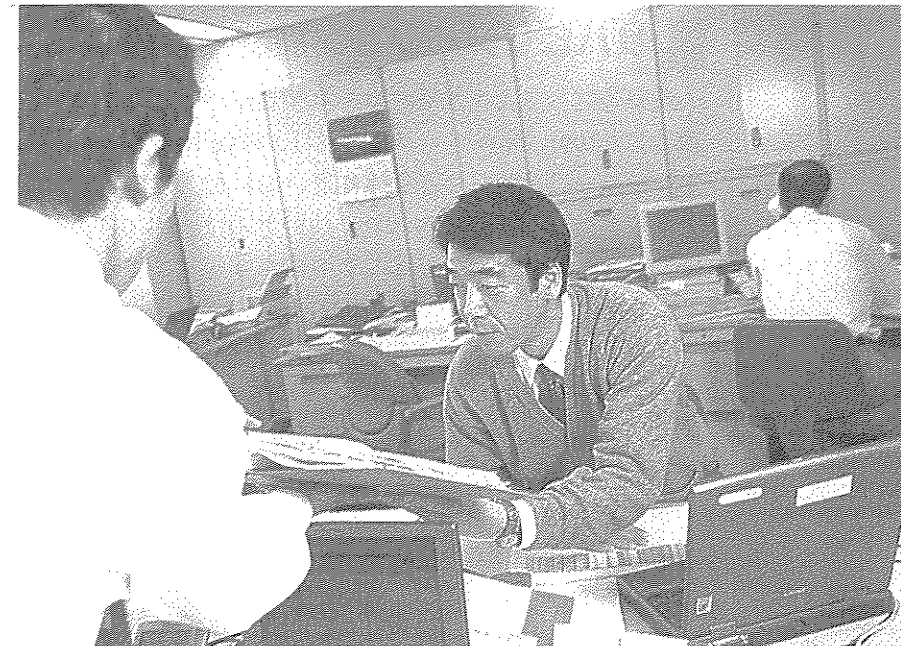
- 右上下肢障害と記憶障害などの高次脳機能障害が残る
- 10カ月間にわたり、一人暮らしができるまでの運動機能リハビリのほか、記憶障害や注意障害に対するリハビリを行う

職場復帰支援プログラムの実施

- 職業上の障害を正しく理解し、障害にあわせた支援方法などを考えるための基礎評価と作業評価を実施
- 事業所の協力のもと、復職後に行う実際の業務を模擬講習で実施

前職への復帰

- 実地講習期間からすでに復職と認められる
- 発症前より責任や仕事量は減ったものの、情報システム部員として前職へ復帰



情報システムグループになくはない存在として活躍中

グループ長細井清さん）

勤務時間は、岩崎さんの希望により、当初から9時～17時の8時間でした。脳が疲れやすい岩崎さんは、勤務中に激しい睡魔におそわれることがあります。そのため、社内を歩くなど、休憩時間を上手にとって脳を休めるようにしています。これも職場では了承しており、岩崎さんには自分のペースで進められる業務が配分されています。

さらに高い目標への挑戦

2001年4月には派遣社員の契約が終了し、岩崎さんの業務と責任も少しだけ増えます。自分が作ったソフトの運用マニュアルの作成も行っています。この作業は岩崎

さんにとって、決してやさしいものではありませんが、自分の作ったソフトが社内で広く使われることをめざし、改良を重ねるなど、現在もさらに高い目標への挑戦が続いています。

「不安だったリハビリ中に支えになったのは、『いつでも戻って来い』という会社の先輩、同僚の励ましでした。これからも自分のため、会社のために回復できる限界のところまでがんばっていきます」（岩崎さん）

た」（同センター障害者職業カウンセラー土井徳子さん・生川奈津美さん）

8月からの模擬講習では、岩崎さんが所属する情報システムグループから、復職後に担当するリース機器契約書、情報機器管理表を「エクセル」で作成するための資料を提供してもらい、実際の業務を想定した講習を行うことができました。

同グループでは、こうした訓練への協力のほか、岩崎さんが訓練終了後に住むアパートの手配など、公私にわたって多大な支援を行ってきました。

実地講習が復職の第一歩

通常のプログラムでは、3カ月間のセンター内講習の後、実際の業務や職場に慣れるためにセンターの支援を受けながら職場で試行的に就業する実地講習があります。ところが、岩崎さんの場合には、会社側が実地講習を復職と認めてくれたため、岩崎さんは2000年10月、前職への完全復帰を果たしました。

「入院中の人材不足は、社員の異動ではなく派遣社員で補いました。いつでも自分の席に戻って来られるようにすることで、安心してリハビリができればと考えました」（同



職場概要

■ 住所 東京都品川区大井1-47-1
■ 事業内容 港湾運送業
■ 従業員数 362名